

授業改善に向けた授業アンケートの活用

安野 舞子

創価大学 教育・学習活動支援センター

はじめに

創価大学では、1999年から学生による授業アンケートを実施している。これまで授業アンケートの結果は、単純集計したものが教員一人ひとりに提示されると共に、学部・学科別に設問項目間の相関を測る等の分析は行われてきたが、授業改善に向けた更なる活用方法が求められている。

本学は、2004年度から履修単位上限制度を設け、科目あたりの授業外学習時間増を目指している。そこで、これまでの授業アンケートのデータをもとに、学生の授業外学習時間が多く、同時に学生が高い満足度を示す授業にはどのような特徴があるのかを調査した。これは、学生の学習時間が多く、かつ満足度が高い授業を“望ましい授業”として、授業外学習時間増に向けた授業改善の一つの目標とするものである。

調査概要

本調査で使用したデータは、平成17年度後期から19年度前期に実施された計4学期分の授業アンケート結果である（分析対象科目数：3,985、実技を除く）。アンケートは、学生の自己点検4項目、授業に対する評価7項目（いずれも5段階評価）、および自由記述から成り立っている。

インタビュー調査の対象科目の抽出にあたっては、4学期分の科目別平均データの中から、学生の自己申告による当該授業の週平均予習・復習時間が1時間以上で、満足度が「ほぼ満足」以上であり、かつ4学期中2回以上その基準に該当した科目とした。その結果、50の科目が抽出された。そのうち、語学系を除いた科目の担当教員に個別にインタビュー調査の依頼をし、快諾した7名の教員（講義系科目2名、演習系科目5名）にインタビューを行った。

結果と考察

<定量的分析>

「授業アンケート票」において、学生の授業外学習時間については次のように尋ねられている：「あなたはこの授業において毎週、平均するとどの程度の予習・復習（課題への取り組みも含む）をしましたか？」。この設問に対する回答は、[5：3時間以上、4：2時間程度、3：1時間程度、2：30分程度、1：何もしなかった]の5段階評価の中から選ぶことになっている。平成17年度後期から19年度前期までの全学平均値は2.02であり、71%の学生が平均値以下であることから、近年の本学学生の授業外学習時間の傾向として、1科目あたり週平均が30分以下の学生が大多数を占めることがうかがえる。

「学習時間」とその他の設問項目間の関連を調べるために相関分析を行ったところ、「学習意欲（「あなたはこの授業について、教員に質問するなど意欲的に学習しようと思ったか？」）」と「授業中のノート取り（「あなたは板書事項、講義の要点などについてノートをとりましたか？」）」との間にそれぞれ弱い相関が認められた（表1）。

表 1. 学習時間とその他の設問項目との相関

	学習時間	ノート取り	学習意欲	教材適切	教員熱意	進度予定通り	学習支援	理解度
ノート取り	.279							
学習意欲	.365	.408						
教材適切	.173	.287	.315					
教員熱意	.152	.279	.289	.534				
進度予定通り	.118	.185	.210	.434	.444			
学習支援	.202	.246	.346	.461	.581	.427		
理解度	.185	.314	.377	.522	.473	.383	.462	
満足度	.195	.339	.383	.607	.609	.440	.546	.718

全ての相関係数は $p < .01$ で有意

一方、「満足度」とその他の設問項目間の関連をみると、最も相関が高いのは「授業の理解度」であり、次に「教員の熱意（「教員は熱意をもって授業を行いましたか？」）」であることが認められる。そこで、教員が熱心だと授業に対する満足度は高くなり、学生の学習意欲が高まれば学習時間が増える傾向にあることから、「教員も熱心に教え、学生も意欲的に学習する授業」を理想的な授業と想定し、「教員熱意」と「学習意欲」とを組み合わせて学習時間についての分析を加えてみた*（図 1）。

その結果、学生も教員も意欲的な場合が最も学習時間が多く、どんなに教員は熱心でも、学生の学習意欲が低ければ学習時間は伸びないことが分かった。一方、教員の熱意がそれほど高くなくても、学生の学習意欲が高ければ学習時間が伸びる傾向も示されており、学習時間増の鍵は、「学生の学習意欲をいかに喚起できるか」にあることがうかがえる。

<定性的分析>

インタビューした教員の担当科目すべてに共通していることは、授業でグループ学習または LTD 話し合い学習法が取り入れられており、学生主体の授業（学生参加型授業）が展開されていることである。グループ学習/LTDを行うためには、毎週事前に何らかの課題をこなす必要があり、それ故、授業外学習時間が増えることが分かる。しかしこれは、課題の分量が多いから学習時間が増えるということだけを意味しない。インタビューで異口同音に聞かれたことは、グループ学習/LTDは学生同士の刺激となり、そうした刺激が、学習意欲を高める一要因になっている、ということであった。また、教員自身が、学生の学習意欲を高めることに意識的に努力しており、こうした学習意欲の喚起が、学習時間増を促進させていることがうかがえる。

尚、インタビュー対象となった 7 科目中、3 科目の授業においては、成績評価が ABC ではなく PF/SU 評価であった。その担当教員から聞かれたことは、PF/SU 評価のもとでの学生の学習態度・意欲、および学習達成度の低下への懸念であった。学生が主体的・意欲的に学習できるようにするためにも、厳格な成績評価の必要性が考えられる。

以上のように、本研究では授業アンケートの結果をもとに、本学が取り組むべき課題（学生の授業外学習時間増）について既に高い標準に達している科目群を洗い出し、その特徴を精査した。これらの結果を、今後、授業改善に向けた学部別、および全学的 FD の取り組みに活用することが期待される。

*教員熱意・学習意欲とも、評価 4（「熱意があった」・「ほぼ心がけた」）以上を「高い」とし、熱意高・意欲高=HXH、熱意高・意欲低=HXL、熱意低・意欲高=LXH、熱意低・意欲低=LXL の 4 つのグループに分類した。

図 1. 教員熱意×学習意欲別学習時間の平均

